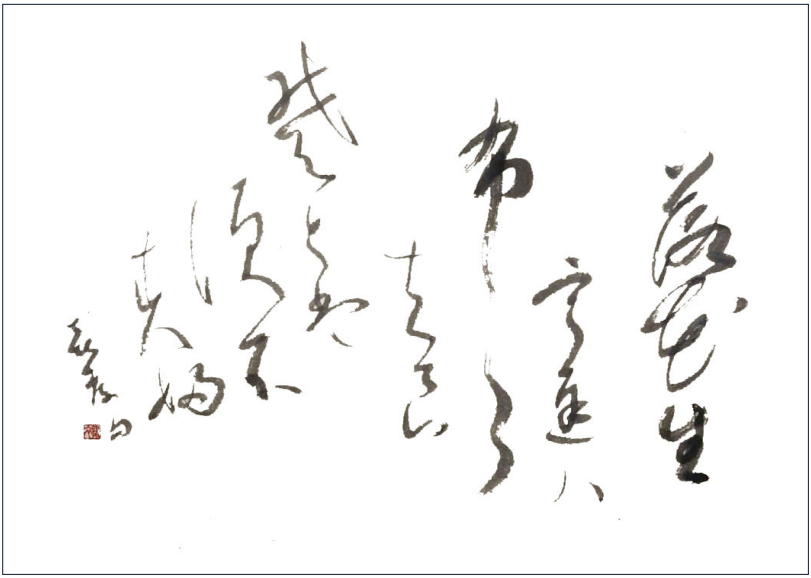
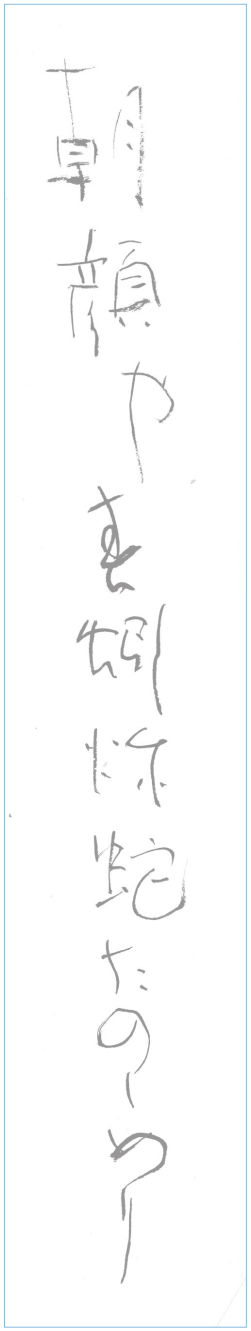
あさ

7

2024



笹本鶉衣



朝顔や垣根竹蛇たのもし

佐藤竹僊

あを

七月集

坐・誹

佐藤　竹僊

春の夜の明りを消さず妻ねむる

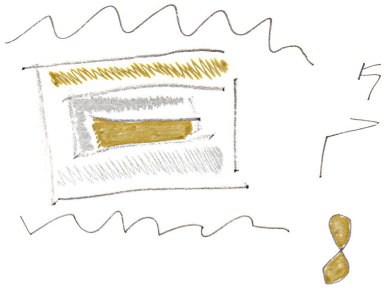
櫻にも隠し所が鳥出てくる

草むらをむしつてゐたら春がゐた

まつさらなビニール傘で春の雨

てのひらを花と咲かせて遠のく人

薄倖もしあわせの中蕗の薹



手底地にあてて立つねぢり花

觀音のまなざしのあり桐の花

桐の花に觸れたる風は障るなり

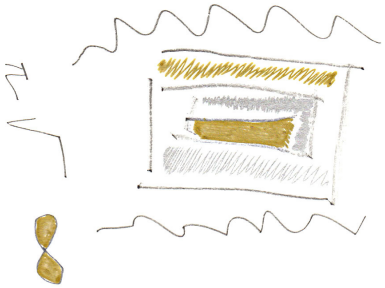
はつなつや妻の呉れたる玉手箱

體溫と血壓測り新茶飲む

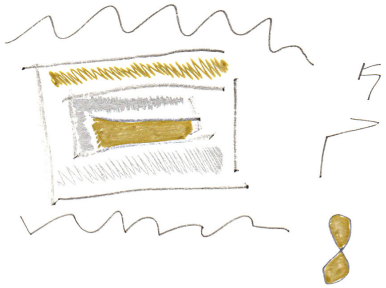
葉ざくらに蝶はしばらく絡みゐる

夏がきたマグロのやうに剃毛す

薄倖の茅花なんとも搖れやすく



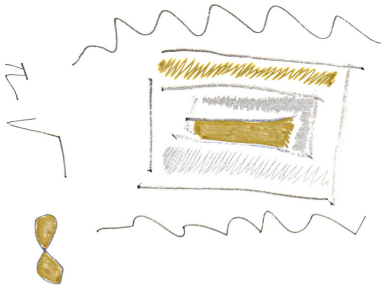
まひるまの茅花はいろをうすうして
をとこ名のうへにをんな名更衣
環八を低空で行く梅雨鴉
廢屋をのこして草を借り盡くす
いうれい蜘蛛にその後は遭はず借り家屋
毟りたる草日ざかりの石の上
目の前をいつたりきたり夏手套
冥王星のあたりの明度胎内は



野鳥

長崎桂子

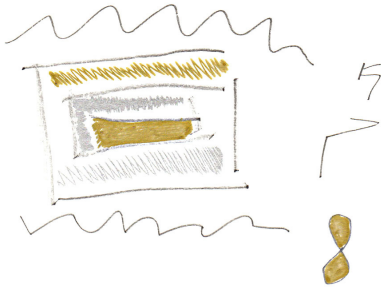
鈴鹿連峰西より南へ山笑ふ
草むらに蒲公英一本黄を誇る
山桜鈴鹿山山はなやかに
新緑や総身みどりに山の道
野鳥きてつつじの蜜に朝まだき
初夏の川野鳥二種類にぎにぎし
玄関に武者こけし飾り友の五月
ニュース聞く気候不順にさつき芋
風つよき藤房高く繰返す
太陽フレア世界オーロラの五月



五月

森　なほ子

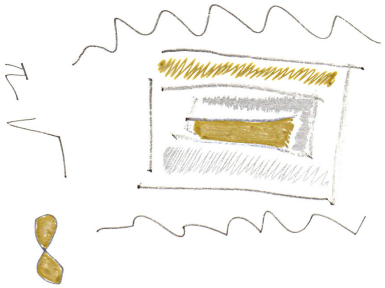
周りより中のひんやり春炬燵
寂しさの正方形や春炬燵
落花ひらひらこれで終はりと言ふやうに
五月かな日に日に庭の狭くなり
スケッチの背に二三人風薫る
根元まで柔き蕨の届きけり
あく抜きの灰添へられて蕨の荷



カンカン帽

赤座　典子

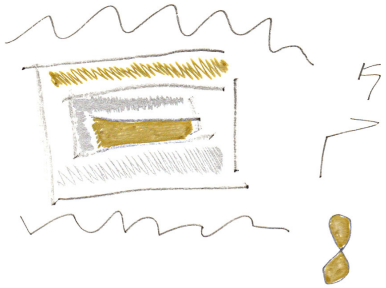
若葉雨昨日の富士はこの辺り
本栖湖の白き倒木風薫る
子無き人の句に巡り会ふ子供の日
好奇心の強さ変らぬ羽抜鳥
ハイタッチ決めてごらんと鉄線花
椿若葉照るを隣人褒めにけり
紫陽花の葉を撓ませる雨の粒
御徒町和服の女子のカンカン帽



初夏の日々

秋川　泉

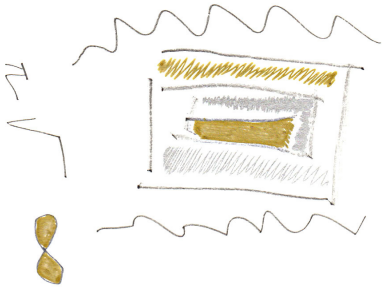
ランドセル差してゐるのはカーネーション
薫風や川面光らせ貨車のゆく
迷宮か曲がれば小道著莪続く
たわわに咲く蔓薔薇雨の激しき
夕闇に定家葛の家はなく
病むひとを誘ふ宵の半夏生草
緑濃き猿島草深々と日蓮の洞窟
初夏の香や真竹ご飯に猫のくる



旧街道

七郎衛門吉保

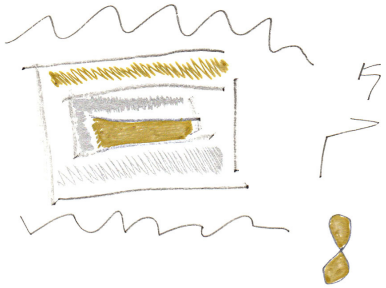
さぁ始めむ促すピーツク四十雀
洗ひものもひらひら五月散歩道
筏ふう焼アスパラに箸の櫂
雪解富士見上ぐる麓の餺飥や
富士みやげ山と積まれて傘雨の忌
お手玉を引っ繰り返した茂りかな
初夏の峪胡麻塩ぽつんと白い斑
パパ洗ふズツク六足夏の星
夏の街道（みち）海苔はぱりっと品川宿
旧街道江戸前残る焼穴子



木挽町

篠田純子

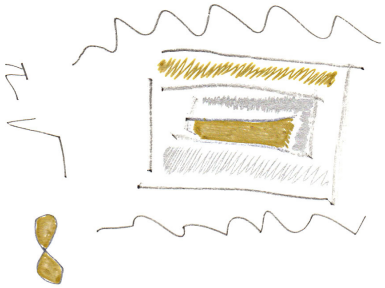
木挽町山車の上なる桃たらう
老練の木やり良き節神輿発つ
晩学の校門もちの花にほふ
「奇貨居くべし」に濃きマーカーす夏期講座
梅雨の朝鳩寄り添ひてコンコース
夫子等の位置情報や走り梅雨



夏が好き

篠田大佳

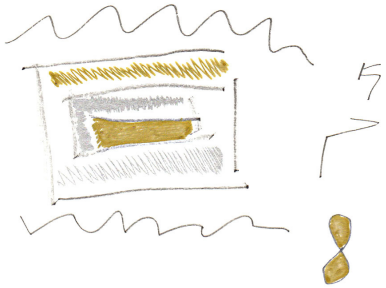
初夏のみを夏と呼ぶなら夏が好き
昭和の日未来へ叫ぶ歴史劇
かき揚げの衣の薄き憲法記念日
腹減れば岩も魔物や夏隣
階段に腰掛けまづは缶ビール
厳選の缶つま空けて風かをる
ねぢりはちまき薫風に揺れてをり
沈黙にはさみ軽やか夏の雨
夏雨の古書肆の軒に立ち止まる
海猫は磯の香りを連れて夏



薔薇

須賀敏子

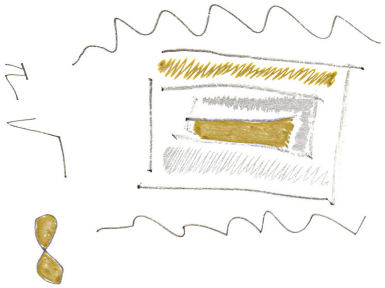
只一つ褒められる薔薇咲きにけり
新しきブラウス似合ふ五月来る
ゆっくりと新茶を汲めり雨の午後
遺されし木瓜紅白や咲ききって
咲き初める三葉躑躅は霧のなか
青柿の落ちて行方は風まかせ
ばっさりと褒められし薔薇切りつめて
恙無くまあまあ自由額の花



ゆいの森荒川

都築繁子

急カーブの電車と車薄暑光
薔薇咲くや鳩を手にする少女像
窓青葉吉村昭の記念館
かの作家の書斎の椅子や夏来る
一輛電車の音を重ねし薔薇香る
スダジイの御神木見る夕薄暑
躓きをやつと支へしさくらんぼ



烝收集

遠き日の農夫の相鍬はせり　佐藤竹僊

紙茶碗のお薄とお菓子花の茶屋　都築繁子

チューリップ静もる庭の聖母像

新社員にブリ贈る南勢の入社式　長崎桂子

花の昼皮ごとたべるバナナかな

かび臭き重き育児書花曇　森なほ子

春の日を哀しみごとに集ひをり

佇まふ越後平野に薄霞　赤座典子

片栗の花の御浸し藍は映ゆ

待ちこがれざわめく日々の初桜　秋川泉

行き暮れて前も後も花の闇

鶯や弥彦に戻り鳴き極む　七郎衛門吉保

病院跡桜も散りて波郷の碑

花ふぶき五平餅屋の笑ひ皺　篠田純子

ヨーグルトに苺ジャム載せ誕生日

花魁の模型窓向く春の果　篠田大佳

ハチ公を見てゐた人を想ふ春

躑躅咲く何故にこんなに賑やかに　須賀敏子

戦争を知らず八十路の春となる

喜孝抄

喜孝抄

五月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

春かすみ餘生ばかりの動物園　　佐藤竹僊

なるほどと思いました。動物園の動物は皆余生なのですね。そこで生まれた動物など、最初から余生。自分の力で生きることが「生」なのだから。草食動物はいいとして、肉食動物の展示は、私は以前から反対です。サバンナで狩りをしたこともない豹やライオン、動物園は虐待空間でしかないでしょう。この句はそこまで極端ではないけれど。（なほ子）

弘子女史朝寝のままのつもりなり　　佐藤竹僊

「あを」に参加されていた竹内弘子さんへの追悼句と思われます。朝寝のつもりでいるくらい穏やかなるお顔だったのでしょう。掲句の軽口にもお付き合いの長さが感じられます。実際に作者が弘子さんと直近で対面したのは、お見舞いに行った時だったようなので、生きている姿をそのまま記録しているのかもしれません。

弘子さんとは、一度傳句会でお会いしましたが、基本は弘子さんが選者をやられていた、あをかき集に投句する、誌上のお付き合いでした。若者の機嫌を損ねないような言葉選びが巧みで、その気になって投句した記憶が残っています。弘子選より若書きを。〈間違へて金魚の国へ行つてみる　大佳〉

「あを」四月号のあとがきにも弘子さんの句が掲載されていますが、鑑賞では趣向を変えて、弘子さんの『暖流』一九八六年度の暖流賞受賞作より一句抄します。〈雁や軽々と抱きとられたし弘子〉

謹んでお悔やみ申し上げます。（大佳）

低山も登れば嬉し春の雲　　須賀敏子

旅好き、山好きの作者。長年の趣味だったが、年と共に高山、難所、遠方には行けなくなるのは仕方ないけれど、そうは言っても手の届く低い山にはまだまだ行ける。低くても自然は手抜きしません。十分に良さを味わわせてくれる。「嬉し」が良いですね。（なほ子）

源氏講座次回はミモザの降る頃に　　須賀敏子

ミモザは引つ越して来た下石神井のお向ひの駐車場の奥にある。咲いてそこにミモザがあるとはじめて知つた。家の人は咲いてゐるうちにバサバサと花の付いた枝を落してしまふ。不思議なものを見た。ミモザは藤穂さんが好きな花だと聞いてから気にしてみてゐる。あまり見かけぬ花だつたので、喜んだり悲しんだり。「願わくば花の下にて春死なむ　その如月の望月のころ」と西行は、花ばかりか、月にまで注文をつけられた。藤穂さんもミモザの咲く季に逝かれた。

掲句は「咲くころに」と詠まず、「降る頃に」としたところに趣きが生じた。（喜孝）

出番なき大皿愛し黄水仙　　都築繁子

戸棚の整理をした。一番奥から出てきた大皿。お客のもてなしに、家族の集まりに必ず使った大皿、たっぷり料理を盛りつけたものだ。ここ何年もそんな機会もなく、これから先もないだろう。処分しようか迷う作者。「黄水仙」は少し唐突に思いました。（なほ子）

春の雲歩道橋より車見る　　都築繁子

ある時のある出来事を書き留めてどこに詩があるのか、俳味があるのかと問はれるのももつともと思ふ。しかしこの句に面白みを覚える者もゐることも確か、書いてゐる私がそのうちのひとり。気候も温暖、春の雲がぽつかり浮いてゐる昼下り。道の向う側に行くために、歩道橋を利用する。歩道橋を登つても、すぐに繁子さんは降りない。しばらく手すりにつかまつて下を流れる自動車を見てゐる。この句を読んでゐると、繁子さんは春の雲ではないかと思へてきた。（喜孝）

川を見るバナナの皮は手より落ち　　虚子

春告げる菜花おいしや感謝して　　長崎桂子

農業の成果は一期一会で、今年と同じようなことは来年は起きない。そう考えた時に、今春に実った菜花に対する感謝も、今の社会で共通の感覚である「感謝」の実感よりもさらに深いものを読みます。ただ実るだけでなく、それが美味しいのですから、ありがたさも極まります。（大佳）

実南天すべて野鳥に食べられて　　長崎桂子

南天の実が食べられたことを桂子さんは惜しんでゐる。残念に思つてゐるのである。冬枯の庭の点景として、南天の実は紅く庭を飾つてくれる。それが一粒も残さず、野鳥のお腹に収まつてしまつた。よほど野鳥もひもじかつたのだと思つて、諦めていただくしかないですね。（喜孝）

亀鳴いてラインの「。」は鳩にやる　　森なほ子

掲句は、いわゆる「マルハラ」、若者がメッセージツールでの会話に、句点（。）を付けると、真剣に怒られていると感じて、萎縮する現象のことを詠んだ句であると思います。「亀鳴く」は、春になると、亀の鳴く音がするように思うという、空想の季語です。現実には聞こえない声を聞いて怯えている若い人から、句点を豆のように取り上げて、鳩にくれてやるという淡々とした状況処理に、思わず笑みがこぼれます。

歌人の俵万智さんがX（旧Twitter）で〈優しさにひとつ気がつく　×でなく○で必ず終わる日本語〉という歌を発表していました。短歌と俳句の比較になってしまいますが、同じテーマでも、直情で処理する短歌と諧謔で処理する俳句の特徴がよくわかる対比であると思います。（大佳）

§

俳句表記に句読点が使はれるかと思へば、ＬＩＮＥの日本語のやり取りに句読点が入つてゐることに違和感を覚える世代もゐる。日本語は神代より活き活きと躍動してゐると見るべきか。句中の「。」も句会での披講の時は音に出さなければならない。使ふにしても読むにしても面倒な「。」。エーイ鳩の餌に呉れてしまへ、といふところか。なほ子さんが気になつた小ニュースを「亀鳴く」といふ意想外な季語を斡旋。豆のやうに「。」を鳩にやつてしまふと世情を手玉に取り、楽しく遊ばれた一句。（喜孝）

レジの横慎ましやかに桜餅　　赤座典子

桜の季節になると、お菓子屋さんに並んでいる桜餅ですが、掲句の詠まれた場所は、スーパーマーケットかコンビニか。桜をあしらって、桜餅フェアをやるほどの人気はなくて、レジ待ちの時間に見えやすい位置で、「ながら買い」を期待している配置です。季節ものに対する関心が離れている現状を描写しています。（大佳）

§

レジ横にわざわざ棚を設置し出入りを狭め、そこに商品が笑顔で待つている。金額のささやかなもの、必要だが、買ひ忘れやすいものなどが置かれてゐるやうだ。お店のどんな戦略か訊いてみたい気もする。典子さんの行かれたスーパーのレジ横には季節を知らせる桜餅が目に入つた。慎ましやかに少し気取つて桜餅はそこにゐた。その桜餅はきつと買い物ケースの一番上にちよこんと乗つたことであらう。「慎ましやかに」で何気ない光景を句に仕立てあげた。（喜孝）

「きつとね」と指切りをする春の闇　　秋川　泉

指切りをしている「春の闇」という気分が、鑑賞の核になると思います。春の闇は暗い闇ではあるが、花のにおいも感じられて、明るい気分のニュアンスも感じられます。闇から光を見つめるような、切実とした感情を掲句に読みました。（大佳）

わがままにとおせんぼする春の夕　　秋川　泉

連句なら、恋の座にも適ふ一句のやう。連句をおもつたのは、この一句では、完結してゐるとも見えるが、何か不足してゐるやうなところがある。そのあたりが連句を思はせたやうだ。どんな物語が裏にあるのだらう。（喜孝）

卒業式母の着物のナフタリン　　七郎衛門吉保

ナフタリンは衣類の防虫剤として用いられる物質で、箪笥に風を入れると、特徴的なにおいがふわっと感じられます。掲句での「ナフタリン」は、嗅覚を刺激する言葉として用いられています。長い間着なかった着物を卒業式に合わせて下ろしたという句意と読みます。着物を先代から譲り受けた母が子の卒業式に着たのか、子が母の着物を卒業式に着たのか、詳らかではないですが、代々

大事に保管しているいい着物であることは、伝わってきます。（大佳）

春愁や美容師の褒む白髪かな　　七郎衛門吉保

白髪を如何様に褒められやうと素直に喜びに変換できない。白髪を褒められても複雑な思ひがのこるものだ。そのあたりの心の揺らぎ、ゆらめきを「春愁」が上手に受け止めて佳句にしてゐる。が、表記は中七の「褒む」で切れてしまふ。上五で切れ下五「かな」で切ると、切字が三つも使はれてゐる。気持ちはわかるが残念。早くわたしが気がつかなければいけなかつたのに。

「春愁や美容師褒むる白髪を」「美容師が白髪を褒む春愁ひ」などでは。（喜孝）

「お金を入れて下さい」セルフレジ余寒　　篠田純子

機械の発する言葉をそのまま俳句にしたのは、珍しい。しかも「お金を入れて下さい」という俳句と対極のフレーズ。しかも全くの破調の11―5―3の19字です。とはいえ、「余寒」という俳句以外にはあまり使われない季語により辛うじて俳句とわかる。もしこの句が他の一連の句の中に混じっていなければ、俳句とは思わないかもしれない。それほど、季語とはフレーズを俳句たらしめる根本的なものと思います。作者の自由な発想、大胆さに脱帽です。（なほ子）

憲法改正反対のこゑ花粉とぶ　　篠田純子

忖度をして句を読めば作者の意図はよくわかる。このやうな政治への発言（？）に「花粉とぶ」は俳人の矜恃である。おもしろい。

「改正」を『広辞苑』では〈改めて正しくすること〉。『明解国語辞典』では〈法律・規則・規約などの不適当な点や不備な点を改めること〉。『漢字源』では〈改めて正しくすること〉と私の持つてゐる電子辞書にある。掲句に戻ると憲法を正しく改めることに反対するといふ句意になる。このやうな主義主張は正しく伝へたいとおもふが拙句にも見返せば足場がしつかりしない句もあるやも知れない難しい問題だとおもつた。ちなみに「日本国憲法の改正に反対し、いかすことに関する請願」と請願書の件名には書かれてゐる。このことに不思議におもふのはわたしだけかもしれないが。（喜孝）

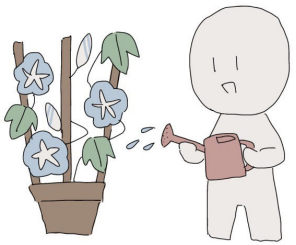
戦つた少年の傷雪解水　　篠田大佳

鮮明な印象の句ですが、色々な意味に取れる。少年は誰と何のため戦ったのか？　外国人か日本人か、喧嘩の擦り傷程度の傷か？　又は少年はもう生きてはいないのか？　私は何故か、雪解水で傷を洗うモノクロ映画のシーンが浮かんだ。（なほ子）

青梅行国分寺着うららけり　　篠田大佳

ゆつくり句を眺めると、二つの地名とも趣きがある。青梅線に乗り換え十三番目の駅。今は乗

換なしで、中央線青梅特快がある。土日になると平日より本数が倍増する。青梅行に乗り、青梅に行くのかと思つたら、国分寺で下車と。もちろんよく読めば下車するとは一言も言つてゐない。下車するもよし、扉は閉まりさらに青梅に向かふもよい。「青梅行」はゆつくりと動き出した。なにかの用での乗車かも知れないが、心持ち次第で穏やかな小旅行になる。まさに「うららけし」である。（喜孝）



季語あれこれ「朝顔」

佐藤喜孝

この猛暑の中、朝顔はもりもり咲いてゐる。元気は元気だが朝顔でも想定外の暑さか、咲いたら早々に凋んでしまつた。特に今朝猛暑ゆゑか半開きで閉じてしまつた。このやうに朝顔は夏の花と思ふのだが、歳時記では秋の項に収まつてゐる。朝顔に関する季語では春に「朝顔を蒔く」、夏に「朝顔の苗」「朝顔市」、そして朝顔の花は、「朝顔」として、「朝顔の実」とともに秋に収まる。

夏と秋と二つにわりし西瓜かな　　**夏目成美**

といふ江戸期の誹諧がある。西瓜も朝顔と同じく秋の季語。昔の人もとりあへず秋の季語として西瓜を詠んではゐるが、不思議に思つてゐたやうだ。ちなみに季語辞典『十七季』には

西瓜〔晩夏・植物〕従来の季は初秋。

とあつた。歳時記は変つていくのであらうか。いやこのやうにもう変つてゐる歳時記があるかもしれない。

あるけあるけ朝顔市へ投票へ　藤野　寿子
とぢるでもひらくでもなし朝顔終ふ　竹内　弘子
紺朝顔銹を重ねて肥後之守　佐藤　恭子
朝顔を蒔きて残りの種埋める　金子蛙次郎
平凡に咲ける朝顔の花を愛す　日野　草城

さて『あを』作品で「朝顔」を楽しみませう。

朝顔の種を片手に土を掘る　河合　笑子
朝顔の苗にそだちぬ蔓うごく　佐藤　竹僊
朝顔の双葉あまたに町工場　山荘　慶子
いただきし千代女あさがほいま双葉　東　亜　未
朝顔の花の小さき美容院　芝　尚子
父の日の父昼顔にあさがほに　堀内　一郎
よい方へよりよい方へ朝顔市　森　理和
佃島店の朝顔二階まで　芝　尚子
しばしばの夜雨朝顔のぼり咲く　渡邉　友七
朝顔の一輪まじり大野原　山荘　慶子
朝顔の紺のいち輪終戦日　芝　尚子
分数ほめ朝顔日記手直しし　藤野　寿子
朝顔に転がしてゆく旅鞄　森　なほ子
朝顔の咲くさみしさの十一月　早崎　泰江

朝顔は夏休の自由研究で育てたりと身近な花である。左手にこぼさぬやうに種を、右手に小さなシャベル。朝顔といはず、種を蒔くのはワクワクする。蒔く種もあれば残つた種は埋めるといふ。蒔くと埋める。同じやうな作業でも言葉が違ふと…。町工場の朝顔、下町の朝顔。大野原・美容院などどこで咲かうと朝顔は朝顔だが、所を違へると朝顔の顔も佇まひも自ずと違つてくる。時も違へても、朝顔の趣は変る。終戦日の朝顔の色を紺と定めた人の意気。十一月の朝顔は、ほんに「咲くさみしさの」である。

あとがき

六月号の表紙

「養護生徒ひとり手をふる日の盛り　茂」はA4ぐらいの小品。『獐』の表紙もこのやうなデザインで終始した。和紙と書いていただく俳句をメモして『ボルガ』に行く。間を見てカウンターに紙を出す。とカウンターの下から使ひ込んだ硯を出し墨を摺り始める。「何を書くの」と。用意のメモを出す。一句が収まるのかと心配になるほど大きな字で書き始める。最後は隙間をさがして帳尻を合はせて出来上がる。といふことで「茂」はいつも俳句の隙間にねじ込まれる。気に入るまで何枚も書く。これが毎月の行事。それを帰ってからハンディスキャナーで吸ふのだが、吸ふ面積が狭く一回で済まない。表紙の茂作品は誠にキレイに収まってゐる。いつもと違ひ余所いきの顔である。

養護生徒けふを一人の夏休
養護生徒の手造のパン桃の花
養護生徒下校の雪に犬と駈け
養護生徒手を伸べ白鳥抱かんと
養護生徒白鳥となり舞ひつづく

養護生徒を詠んでゐるが少年の句も多い。

脚に蟻這はせて少年ひとり遊ぶ
山火事で何がありしか少年死す
少年と手を比べをり除夜の湯に
少年にわれは霞か亀の鳴く
少年のひそかにをりし氷店
正月の少年玄関の掃除せる
美しき鳥となり少年梅雨の木に

これらの作品の中に「ひそかに」茂がゐる。孫もゐる。少年に比べては少ないが少女の句もある。

スポットライトにわが少女泛き堇買ふ
バナナ林駈けゆき少女海に入る
ブランコにゐる被爆死の少女かな
雪啖つて少女三人はにかみ去る
白息がまづ胸を舞ひ少女唱ふ

高島茂作品の一部を読み返してゐて、身に余る人生だったなあとおもつた。

七月号の表紙

「落花生内者富良富良外者須夫須夫　喜孝句

鶉衣　印」

笹本としをさんが拙句を揮毫して句集のお祝に頂いた。句集とは『青寫眞』のことである。なぜだか知らぬがこの句を選んで書いてくれた。うれしかつたしびつくりした。二カ月ぐらい前のことである。整理してゐてこの書が出てきた。断捨離のドサクサ紛れにも生き残つた。ところがどうしても書いてくれた人の名前が思ひ出せない。すつぽり空白。驚いた。鳩ケ谷に住んでゐたことがあつたがその時、としをさんもお近くに住んで居られよく行き来した。としをさんの句集のお祝ひも、もう一人の女性俳人三人で祝賀会をした。今の私と同じく一人暮らしゆゑか娘を可愛がつてくれもした。楽しい思ひ出がいつぱいなのに頭を絞つても名前が出てこない。『半狂』の仲間なので堀内一郎さん助けてと思つた。それが数日前唐突によみがへつた。頭のどこかに仕舞はれてゐたんだなあと感心した。「内者富良富良外者須夫須夫」は『古事記』から拝借。ロッキード事件が底意にある。

鬼おこぜ気弱ときけば可憐かな　　笹本としを

土喰つて虫喰つて口渋い燕

木の如き生が立派に思える冬

二〇二四年七月号
発行日　七月二八日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／福井美佐子・ティリ　エイマ
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）